

石見銀山遺跡の文化的価値と世界遺産登録への歩み

大 國 晴 雄 (おおくに はるお)

島根県大田市教育委員会教育部長

1. はじめに (概要)

(1) 世界遺産登録後の石見銀山とその周辺の状況

30年前は観光客は公称10万人、登録前から年2割ほど上昇し、登録で80万以上／年となった。今後は量～質へ。

(2) 世界遺産登録に至るまでは部分的な国文化財 (史跡)

よく知られていたが保存と活用は鉱業権もあり十分でない過疎の町であったが、国の町並み保存地区となったところからゆったりとした「まちづくり」が進んでいた。

(3) 日本初、遺産登録を目指した「石見銀山課」ができ、県による主導、次は共同、これからは協働して世界遺産を抱えていくことになる。市12名、県12名ほどで担当してきた。登録の直接経費は多くない。

(4) 石見銀山は、16世紀から20世紀までの約400年にわたって採掘されてきた世界有数の銀鉱山。この銀山遺跡の世界遺産登録を目指して、島根県と大田市などは12年にもおよぶ共同した取り組みを行った結果、2007年7月に世界遺産に登録された。文化遺産でありながら産業という分かりにくい分野であり、さらに「鉱山産業の遺跡と自然と今も住み続ける住民生活の調和」を示

す世界的にも貴重な遺産である。

(5) 登録反対もあった地域住民と行政との協働の経緯「ゆったりとしたまちづくり」からの不安の一方で、遺産を保存継承し、活かす最大のチャンスでもあり、それを支えたのは地元保存会50年の歴史。また外部の視点、世界遺産専門家の目。世界に開かれた目など複眼的な思考や活動が結実したもの。

(6) 世界遺産登録と観光、まちづくりとのかかわり急増し、想定以上の来訪者。観光面は大きく変化している。この変化に対応し、持続可能な世界遺産として、またこれから市全体にどう活かすかが課題。

2. 石見銀山遺跡とは

2.1 名称

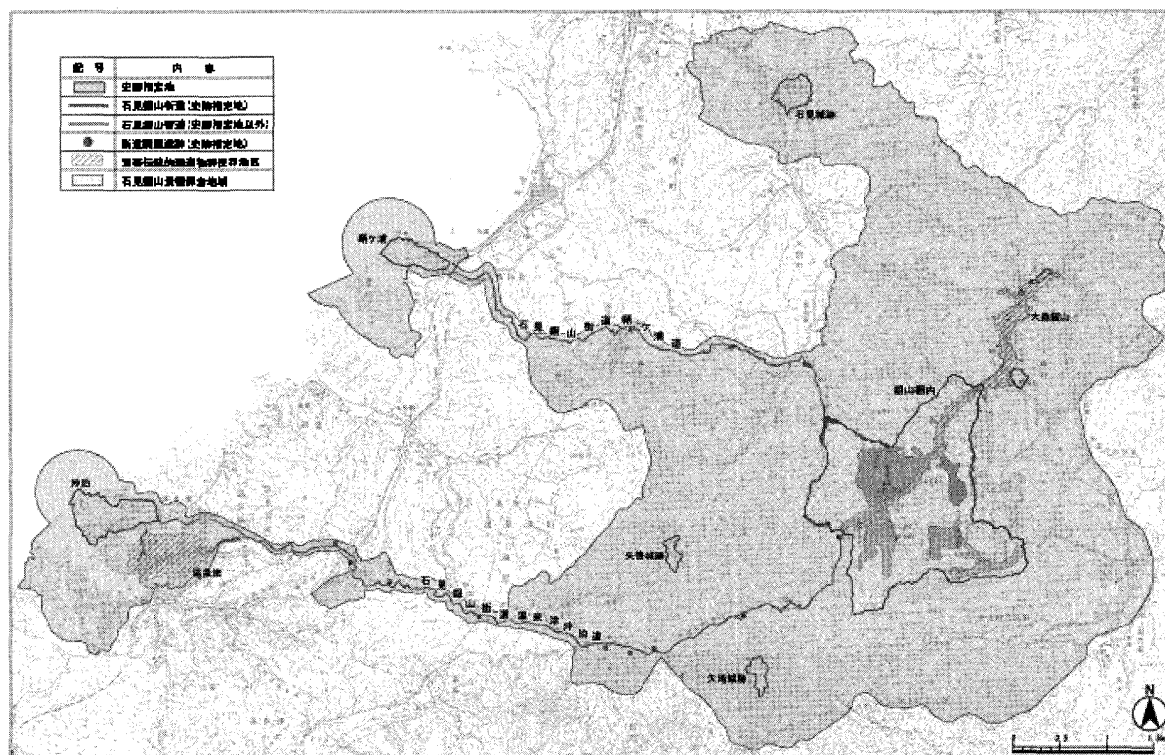
石見銀山遺跡とその文化的景観

(Iwami-Ginzan Silver Mine and its Cultural Landscape)

2.2 概要

石見銀山遺跡は日本海に面する島根県のはば中央に位置し、石見銀の採掘・精錬から運搬・積み出しに至る鉱山開発の総体を表す「銀鉱山跡と鉱山町」、「港と港町」、およびこれらをつなぐ「街道」から成る。

この遺跡は、東西世界の文化交流および文明交流の物



図一 石見銀山遺跡全体図

証であり、伝統的技術による銀生産を証明する考古学的遺跡および銀鉱山に関わる土地利用の総体を表す文化的景観としての価値を持つ。

2.3 遺産の種別

文化遺産：遺跡（文化的景観を含む）、建造物群

2.4 所在地

島根県大田市（旧大田市、温泉津町、仁摩町）

2.5 構成資産

(1) 銀鉱山跡と鉱山町

石見銀山遺跡の中核であり、16世紀から20世紀にかけて採掘から精錬まで行われた銀鉱山跡と、その麓の谷間に細長く存在するかつての鉱山町から成り、さらにこの銀鉱山を軍事的に守護するための周辺の山城跡が含まれている。

銀山柵内と呼ばれた銀鉱山跡には、数多くの採掘跡やこれに近接して一体となる作業場跡等の生産・生活関連の要素、神社・寺院等の信仰関連の要素、山吹城跡・柵列跡・番所跡等の支配関連の要素など、相互に関連しあう諸要素が残り、独特の土地利用の在り方を示している。

鉱山町は南北約2.8kmの歴史的な町並みであり、北側の大森地区と南側の銀山地区の二つの地区に区分される。大森地区には武家・商家・寺院など、様々な身分や職業の人々が混在して居住する町並みが展開し、銀山地区には当時人々が集住したかつての町場の地割の跡や寺院などの信仰の痕跡がよく残る。

また、銀山の周囲に点在する城跡は、石見銀山支配をめぐる攻防戦が行われた重要な城であり、日本における中世山城の構造的特徴をよく表している。



写真—1 石見銀山遺跡の全景
(右：鉱山・仙ノ山、左奥：山吹城跡)

(2) 街道

銀鉱山・鉱山町と港・港町を結び、銀および銀鉱石ならびに諸物資の輸送路として機能したのが街道である。銀山が開発された16世紀前半に、銀山から鞆ヶ浦に向け運搬路とされたのが総延長7.5kmほどの石見銀山街道鞆ヶ浦道であり、16世紀後半に銀山から沖泊に向け運搬路とされたのが総延長約12kmの石見銀山街道温泉津・沖泊街道である。

二つの街道には、通行を容易にするための道普請の跡

がよく残るとともに、道中には運搬に関係した伝承地、通行者や周辺住民が通行安全や病氣平癒を祈った信仰関連の石碑・石仏などが点在して残る。

(3) 港と港町

石見銀および銀鉱石の積出港が鞆ヶ浦と沖泊であり、それに伴って港町として発展したのが温泉津である。鞆ヶ浦は、石見銀山が開発された16世紀前半に当時の国際貿易港博多に向けて銀および銀鉱石を搬出した港である。沖泊は、石見銀山を毛利氏が支配した16世紀後半に銀を搬出した港である。また、温泉地でもあった温泉津は、16世紀後半には沖泊と一体となって銀山で消費される諸物資の搬入地となり発展した。

これらの港・港町には深い湾とその奥の谷間を最大限に利用した土地利用の工夫がみられ、往時を偲ばせる船舶の係留装置や歴史的に関わりのある神社、寺院、伝承地があるほか、谷筋には街路に沿って16世紀以来の集落の土地利用形態がよく残されている。



写真—2 港町・温泉津

3. 講演の骨子（話し足りなかった部分も含めて）

私が30年前に大田市役所に入った時、石見銀山はどうだったか。観光スポットに近いものは代官所跡と五百羅漢程度。石見銀山の観光客入り込み数は、そのほかにも足して公称で年間10万人を少し超える程度ということになっていた。

石見銀山遺跡は世界遺産を目指してから12年目で登録されたが、最短のスケジュールだったと私たちは思っている。暫定リストへの登載は2001年。通常、暫定リストに載ってから登録までは5～10年といわれ、世界遺産を目指す地元の取り組みとしてはやはり20年は想定しなければならない。

3.1 最初は県主導、その後「共同・協働」へ

石見銀山遺跡は1969年に鉱山として初めて国の文化財になった。代官所跡、龍源寺間歩（まぶ）（坑道）などが史跡に指定された。鉱山には鉱業権があり、文化財保存や観光活用では鉱業権に配慮することになっていて、そう簡単に国の文化財に指定してもらえない。87年には鉱山町「大森地区」が重要伝統的建造物群保存地区

特別講演会

(重伝建地区)に指定され、これを契機に「ゆったりとしたまちづくり」が進められていった。

当時の島根県知事が世界遺産を目指す方針を掲げ、幸いにも世界遺産暫定リスト入りした2001年4月には島根県に「世界遺産登録推進室」、大田市に「石見銀山課」を設けた。登録直前の時点でみると県は12人、市は13人(うち1人は県からの派遣)という体制だ。

世界遺産になる前提はそれぞれの国の国内法で保護されていること。日本の場合、文化遺産は文化財保護法、自然遺産は国立公園法などだ。鉱業権に関する問題では、私たちが経済産業省と文化庁の間を行ったり来たりした。

この遺跡は東西世界の文物交流、文明交流の物証であり、伝統的技術による銀生産を証明する考古学的遺跡と、銀鉱山にかかわる土地利用の総体を表す文化的景観としての価値を持つ。これらのことをきちんと説明でき、証明できて、初めて世界遺産になることができた。

3.2 50年前から住民が文化財保存会

世界遺産にたどり着いたのは、長年にわたって文化財の保存活動に取り組んできた住民の方々の力が大きい。新・大田市は平成の大合併で3市町が合併し、世界遺産エリアはその旧3市町に広がっている。旧・大田市は昭和の大合併で19町村が合併してできた。その際、旧・大森町の住民が全戸参加による「大森町文化財保存会」をつくった。大森町はこの地域で最も古く、江戸時代には代官所があり、明治以降も郡役所が置かれた。それらが全部なくなって、このままでは地域のアイデンティティが損なわれる。地域に誇りを持ち、地元で文化財を守ろうと活動を始めた。保存会発足は1957年。世界遺産登録のちょうど50年前だ。

世界遺産の説明で最初にここへ行った時、「せっかく町並み保存でゆったりとした良い町づくりをしているのに、皆目見当もつかないようなものを持ち込んで地域を混乱させるな」と言われた。しかし、地域に誇りを持ち、文化財を守るという長年の活動の流れの中で、世界遺産を目指すことも受け入れられていった。

世界遺産については、外から見たらどうなのかという視点も大事だ。先行している世界遺産と比べて石見銀山遺跡の価値はどうか。私たちもなけなしの金をはたいて世界遺産をいくつか見学してきたが、それによって石見銀山遺跡の価値を改めて見出すことができた。

世界遺産登録と観光振興やまちづくりに関しては、行政と住民の協働ワークショップ「石見銀山協働会議」を設けた。協働会議は最初100人を募集したら200人集まった。そこで「守る」、「発信する」、「受け入れる」、「活用する」という四つのグループに分かれて議論し、計画をつくってきた。

3.3 観光客のコントロールに工夫を重ねる

観光客は急増した。大森地区は狭い谷間の町なので路線バスを使ってパーク&ライドにしようと、町に入る前にバス11台分の駐車場をつくった。駐車場に隣接して、石見銀山遺跡のガイダンスをする世界遺産センターを建設した。観光客はまずそこで遺跡全体について勉強して



写真—3 登録後の観光客急増

から路線バスに乗り、遺跡の中を歩いてもらう。許容人数や環境負荷を考えると路線バスでも多すぎるので、路線バスの廃止を検討している。パーク&ウオークだ。そうすると龍源寺間歩などを見学に行く人は5kmくらい歩かないといけない。お年寄りなど交通弱者はどうするか、いろいろ悩んでいるところだ。

3.4 第1の成果、「地域への誇り」

世界遺産登録の成果と課題は何か。私見だが、第1に登録によって地域への誇りが生まれたこと。至極当たり前だが最も大事なことだろう。大森町文化財保存会の人たちのような誇りが大田市全体に広がりつつある。第2は「完全な保護」だ。国内法で守られているうえに、ユネスコ世界遺産条約によって守られる。きちんと保護して残すことを世界に向け、未来に対して約束するという意味で完全な保護が図られる。

これらに伴って景観が守られ、環境意識が高まる。二つの銀山街道など竹藪になって荒れているところをどうするかといった議論があり、これからやらなければならない課題も多いが、少なくとも世界遺産の景観を阻害するような新たな要因は排除されることになる。

石見銀山遺跡は山の中にあり、「自然との共生」をキーワードにその文化的景観を説明してきた。石見銀山は公害とほとんど無縁だった。産業革命以前のことであり、必要最小限のところを採掘し、採掘跡には木を植えた。周辺の村々では精錬用木炭にする木材を計画的に伐り出し、必ず植林して緑を戻そうとしてきた。これは歴史的な事実だ。

施設面では景観に配慮しながらトイレなどの施設を整え、携帯電話も使えるようにした。現在、電線の地下埋設の工事中だ。

また、協働型の「石見銀山基金」をつくる。民間と行政が1億5000万円ずつ出し合い3億円の基金にする。氏子のいない神社、檀家のない寺などを修理したり、荒れた竹藪を手入れしたりする目的で、またボランティア活動を支援するのに使う計画だ。

今後の課題で何よりも重要なのは保全事業を継続していくことと、ユネスコ精神である人権尊重を世界遺産・石見銀山遺跡を通じて広めていくことだと考えている。

(原稿受理 2008.9.24)